誰もが抱える悩みをパパッと解決！

福田貴一先生の福が来るアドバイス

低学年からの学習習慣がポイント！家庭で育くむ子どもの力

早稲田アカデミー
千葉ブロック統括責任者
新浦安校 校長　福田 貴一

高学年になってからしっかりと学力を伸ばすためには、読解力や語い力、表現力、そして、難しい問題でも自分で考えることのできる思考力など、それぞれ基礎力が絶対に必要です。では、この基礎力はどのようにすればすれば身につけさせることができるのでしょうか。

気持ちを察することで育くむ読解力

たくさんの本を読んだ経験のある子どもほど、内容を正しく理解する読解力が身についていることは言うまでもありません。しかし、その読解力は本を読んだから身についたのではなく、「なぜ、泣いているのだろう」「なぜ、怒っているのだろう」など、主人公の気持ちを考えることを繰り返した結果、身についた力なのです。

とはいっても、今まで、自分のまわりにいる人が何を考えているのか気にしたことがなければ、本を何度読み返しても主人公の気持ちはわかりません。逆に、親や兄弟姉妹、友だちの気持ちを察することのできる子どもであれば、本を読めば自然に主人公の気持ちが正しく読み取れるようになるのです。

まずは、「お母さん（お父さん）はどう感じていると思う?」と声をかけることで、他人の気持ちを察する機会を与えてみましょう。

言葉を調べる習慣は低学年から

わからない言葉は辞書で調べる、今、この「辞書引き学習」が学校教育などで盛んに取り入れられています。一方で、「何でも辞書で調べるよりは、自分で意味を考えた方がいい」と、辞書は最後まで使わせない場合もあります。

実は、この2つのやり方では、身につく力が異なります。前者の場合、身につく力は語い力です。わからない言葉があれば辞書ですぐ調べるので、知っている言葉が増え、表現力も豊かになるのは当然のことです。一方で後者の場合は、知らない言葉の意味を前後の文章から想像することで、読解力を養うことができます。

語い力と読解力。どちらも早い時期から身につけて欲しい能力ですが、低学年のうちは、「言葉は辞書で調べるもの」とイメージさせるためにも、まずは辞書で調べさせることから始めましょう。読解力を身につけさせるのは、中学年以降で十分です。

日記を書くことで表現力UP！

最近の中学入試では、表現力を見るための問題を出題する学校が増えてきました。特に、登場人物の気持ちを表現させることが多く、麻布中学校や武蔵中学校の場合、7割から8割が心情把握の記述だといっても言い過ぎではないでしょう。

ただ、入試の場合、本文中にそのまま主人公の気持ちが書かれていることはほとんどありません。主人公の行動や情景から気持ちを察し、言葉で表すことになります。つまり、どんなに主人公の気持ちがわかっても、表現力がなければ言葉で表すことができないのです。

この表現力は、高学年になってから知識として身につけるものではありません。3年生ぐらいまでに、いろいろな言葉を覚え、使いこなせるようになる必要があります。その一番効果的な方法が日記です。日記を書くことで、自分の気持ちを表現する練習をするのです。おそらく、最初の3日間は「おもしろい」「楽しい」で終わるでしょう。しかし、日記を書き続けていけば、どのようにおもしろかったのか、どう楽しかったのか、そういった言葉が出てくるようになるはずです。自分の気持ちを言葉豊かに表現できるようにする、これが記述問題に上手く対応するひとつの方法です。

家庭での会話も中学受験で役立つ!?

2010年、開成中学校は、国語の入試問題で形容詞連用形の活用語尾が「う」に変わる「ウ音便」に関する問題を出題しました。具体的には、「ありがたい」や「おおきい」、「せこい」に「ございます」をつけさせ、会話として使うのにはふさわしくないものを答えさせたのです。

この「ウ音便」は、中学受験対策として塾で指導されることはありません。それにもかかわらず、なぜ、開成中学校は出題したのでしょうか。その理由は、日常生活のなかで、そのような言葉を使ったことがあるか、または、違和感を覚えたことがあるかを確認するためなのです。

ほかにも、日頃から正しく日本語を使えているかどうかが問われる場合もあります。たとえば、「ぜんぜん食べれる!」。よく耳にすることのある言い回しですが、「ぜんぜん」を使ったのであれば、「〜ない」と否定しなければなりません。「食べれる」は「食べられる」が正しい使い方です。このような「ら抜き言葉」は、今の時代、だれもが当たり前のように使っているので、たとえ子どもが使ったとしても、「間違いだ」と指摘する必要はありません。しかし、入試で解答欄に「食べれる」と書いてしまうと、間違いになります。自然な形で正しい言葉を身につけさせるためにも、まわりの大人ができるだけ正しい日本語を使い、それに慣れさせるようにしましょう。

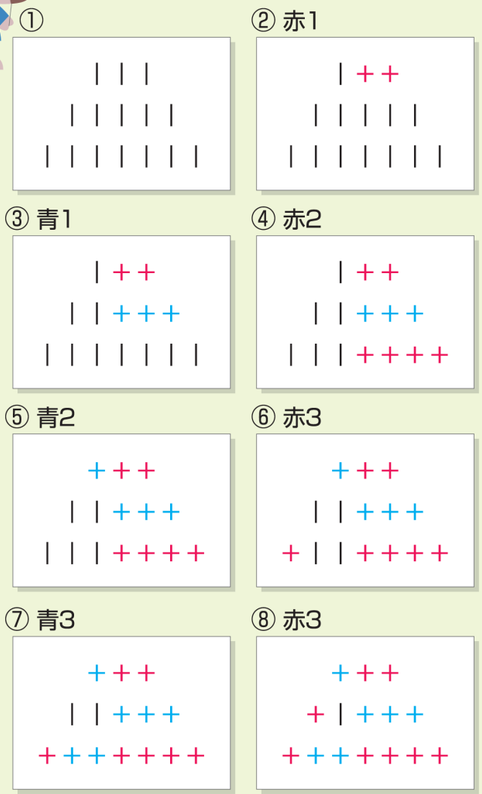
子どものころからの繰り返しが重要！

中学受験で必要とされる読解力や語い力、そして、思考力。これらは、塾や学校で教えて、すぐ身につくものではありません。どれだけ正しい日本語を聞きながら育ったのか、読書や考えることに慣れ親しんできたのかによるところが大きいのです。そう考えると、高学年における学力の伸びは、小さいころからの積み重ねによるものといっても過言ではありません。

今からでも遅くはありません。お母様やお父様も「ら抜き言葉」の禁止や数字遊びから始めてみませんか?

ゲームで鍛える思考力

紙に3本、5本、7本の縦線を引いてください。先攻と後攻を決め、順番に1列だけ、1本以上の横線を引いていきます。最後の1本を引いたほうが負けです。



図は、赤が先攻、青が後攻で勝負した結果です。青が最後の1本に線を引くことになるので負けです。では、この勝負、どこで勝敗が決まったのかわかりますか?実は、赤が3回目（図⑥）に線を引いたときには勝ちが決まっています。慣れてくれば、図④の赤2のように[1・2・3]を残せば勝つことがわかるでしょう。実はこのゲーム、相手に2本以上の同じ数を2つのグループに残すか、または、3つのグループに1本ずつ残せば勝つことができるのです。

必勝法がわかったら、お子さまとゲームをして勝ち続けてください。ポイントは7回に1回くらい負けることです。そうすれば、お子さまは何度でも挑戦してきます。そして、そのうちに途中で「負けた!」と言うようになります。そうなれば、かなり思考力が鍛えられた証と言えます。

[1]から[30]までの数字を交互に1つから3つまで言い合い、[30]を言ったら負けといったゲームなど、必勝法を知っていれば簡単でも、そのことがわかるまでは、どうやっても勝てない算数ゲームはほかにもたくさんあります。ぜひ、親子で楽しんでみましょう。ただし、必勝法はお子さまがコツをつかむまでは絶対に教えてはいけません。「負けることが悔しいから考える」、これがポイントです。

お便りをお待ちしております

みなさまのお悩みに福田先生が紙面上でお答えします。下記のアドレスまでお寄せください。
メール：success12@shahyo.com
採用された方には、オリジナル福スタンプを差し上げます。